

背景情報（2016年4月28日、FISA Matt Smith 発信）
IOC “Olympic Agenda 2020”に沿ったオリンピック・ロウイングのプログラムと
FISA のアプローチ

2014年末、トーマス・バッハ新会長の指導の下、IOC総会は“Olympic Agenda 2020”（オリンピックの課題2020）という、オリンピックの将来についての戦略的方針を満場一致で採択した。“Olympic Agenda 2020”は40項目の推奨事項から成り、そのうちのいくつかは国際スポーツ連盟に衝撃を与えるものであった。

多くのスポーツは、急速に変化する社会、スポーツを取り巻く環境、計画への適応の必要性、および前向きに改革を進めることを意識してきた。バッハ会長は、自ら進んで改革するのか、それとも改革させられるリスクを取るのか、そのいずれかである、と繰り返し述べてきた。同時にそれはIOC自身の問題でもあった。FISAは、IOCのオリンピック大会とオリンピックスポーツプログラムの将来ビジョンをいち早く理解し、積極的にIOCに協調してゆく道を選択した。IOCのビジョンは、私たちのスポーツ、ロウイングに対して3つの挑戦を提唱した。

- －男女均等
- －種目に基づく競技プログラム / 軽量級
- －レガッタコースの柔軟性

2014年、FISAはその主体となる加盟国協会（NFs）に何度か相談を持ちかけ、その過程の中で上記の3つの挑戦を説明し、NFsの意見を求め続けた。そして、いつ議論を行い、いつ決断を下すかについてのタイムスケジュールが出来上がった。これまでに、4度のNFsカンファレンスが段階的に開催され、問題点と次のステップが議論されてきた。その過程を通じてFISAは、NFのリーダーたちがそれぞれのNFの主体構成員に情報を伝え、NFから意見を抽出することが必要だと認識するに至った。そのプロセスを助けるために、IOCのビジョンを含む、これらの3つの挑戦に関係するいくつかの重要な背景情報を、以下に述べることにする。

男女均等

男女均等に関して、IOC はロウイングに対して、2020 年東京オリンピックで男女均等のプログラムを作り上げることを要請した。これは単に IOC の推奨事項というだけではない；国際連合の持続可能な発展（Sustainable Development）にも準拠する課題である。

FISA は、社会においてもスポーツにおいても男女の機会が均等であることが、そのスポーツが持続可能であるために必要不可欠であると認識している。スポーツを行う組織として、ロウイングはアスリートだけでなく、審判、NF のリーダー、チーム役員にとっても男女に均等な機会を提供することで、社会に対するモデルスポーツであるべきである。

ロウイングは現在、男子 8 種目・女子 6 種目からなり、選手数の割り当ては男子 60%・女子 40%となっている。男女均等であるためには、女子種目を 1 つ増やし男子種目を 1 つ減らして、男女 7 種目ずつにする必要がある。同時に、それぞれの種目における参加選手数も男女同数にする必要がある。

種目に基づく競技プログラムと軽量級

IOC にとって、1980 年代以降のオリンピック・プログラムにおいて、“Universality（普遍性）”は競技（スポーツの種類）を追加する、あるいは存続させるための重要な基準であった。このことは Olympic Agenda 2020 においても変わってはいない。何が変わったかと言えば、オリンピックのプログラムを考える際に、個々のスポーツの全体としての評価よりも、それぞれのスポーツに含まれる個々の種目の評価に重点が移った、ということである。この査定方式を採用することで、個々のスポーツごとの選手数の割当て、種目の組み合わせあるいは種目数を変えようとする際に、IOC はより柔軟にそれを行うことができるようになるだろう。

IOC 理事会は各競技（スポーツ）で行われる種目をオリンピック大会の 3 年前までに決める。これまでは、ある競技のオリンピック・プログラム（種目）の決定は、ほとんどその競技の国際スポーツ連盟（IF）に委ねられてきた。IOC の全体会議（つまり総会）は、開催都市がオリンピックの 7 年前に決まる際に、同時に、そのオリンピックで実施される競技（スポーツ）を決める。IOC は 2020 年東京オリンピックの種目について、この変更を実施しようとしている。種目に基づく競技プログラムの評価という方向性が示されたからには、私たちのロウイングのプログラムにおける個々の種目に対して、その正当性を明確に示す理由が必要になるだろう。

3つの軽量級種目（LM2x、LM4⁻、LW2x）は1993年にオリンピック・プログラムへの追加が決定し、1996年のアトランタ・オリンピックで初めて実施された。当時、これらの3つの軽量級種目は、ロウイングにより広範な普遍性をもたらすであろうと期待された。それが1993年におけるロウイングの最重要課題であった。

20年以上前に軽量級を導入して以来、ロウイングに体重階級分けが許されていることについて、IOCは他のスポーツから批判され続けてきた。ロウイングは格闘技と重量挙げ以外では、唯一、体重制限階級があるスポーツである。格闘技と重量挙げでは、明らかに安全と健康が理由で体重階級が設けられているのである。

軽量級ダブルスカルはロウイングの普遍化（＝全世界への普及）を顕著に進めた。しかし、LM4⁻がオリンピックにおける普遍性を進展させた、と正当化することは困難である。この種目で良い成績を挙げているほとんどの国は主要なロウイング発展国であり、決してロウイングの発展途上国ではない。それに加えて、LM4⁻のレースタイムを“open”（無差別級）M4⁻のタイムと比べると、しばしば両者にはほとんど差がないのである。

私たちはIOCと何度か協議したが、上に述べたすべての理由によって、IOCから男女均等化のためにW4⁻を追加すべきであると示唆された。それに伴って、男子種目を1つ減らさなければならぬ。ロウイングの軽量級種目に関する一般的な批判に加えて、LM4⁻は普遍性向上にも寄与していないということから、IOCはLM4⁻を削除すべきだろうと主張してきた。一方、現時点では、IOCはLW2xとLM2xを普遍性推進のために存続させようと思っているようだ。FISAとしては、オリンピック・プログラムから軽量級ロウイングが完全に排除されることのないよう、この点（LW2xとLM2xの存続）を強く主張し続けるつもりである。さらに、IOCとの議論から考えて、他の新規軽量級種目の導入にIOCが同意する見込みはまったくないと言ってよい。

そうではあるのだが、FISAは多くの理由から、軽量級がロウイングの重要な一部であることを全体として保証・確約し続け、軽量級ロウイングを世界中に発展させるためNFと一緒に取り組む所存である。

レガッタコースの柔軟性

IOC が提唱した、ロウイングに影響を与える 3 つ目の課題は、Olympic Agenda 2020 が、持続的なオリンピック開催を可能にし不必要な建設予算を回避するために、既存のあるいは一時的な競技会場の使用を提唱していることである。

ロウイングは今に至るまでずっと、新設されたコース（東京、メキシコシティ、ミュンヘン、モントリオール、モスクワ、ソウル、シドニー、アテネ、北京）がオリンピック大会後に大きな遺産となって、その恩恵を享受する幸運に恵まれてきた。オリンピックの開催地を決めるのは FISA ではないので、ロウイングの場合、次のオリンピック開催都市には既存のレガッタコースがない、という事実と直面するかもしれない。従って、レガッタコースが具備すべき必要条件について開催地のコースに柔軟性がないならば、他の都市あるいは他の国での 2000m コースでさえ、その解決策になり得ることがあるだろう。それと同時に、ロウイングの独自性と特徴を擁護するためには、一定の最短距離を確保する必要があるだろう。例外的な状況に限るが、これがオリンピックにおけるレース距離の短縮を受け入れる可能性を提案する背景である。オリンピック憲章では、地理的かつ持続性を理由として、開催都市以外の都市で、あるいは例外的な状況下では開催国以外で、その競技のすべてを行うことを認めている。しかし、FISA はあくまでも、選手とロウイング競技をオリンピック開催都市に留めておくことが絶対的に重要であると考えている。

結論:FISA のオリンピック種目プログラム

FISA は、ロウイングが揺ぎないオリンピックスポーツであることが何よりも重要だと信じている。そうであることによって、ロウイングは地球規模で、独特な方法で人々に知ってもらえるようになり、; 若い人たちや将来のロウイング選手にとって一種の刺激となり、; 参加者を増やし、健康なライフスタイルを増進し ; ロウイングを更に発展させるために必要な収入（政府からの収入も含む）を確保し、さらにとりわけ重要なこととして、多くのアスリートにオリンピック出場という夢の実現に向けた、一生に一度の機会を与えることにもなる。ロウイングというスポーツにとって、オリンピックで競うことはアスリートとしての経歴の頂点であり、同時に、ロウイングが行われている国が抱く希望の頂点でもある。

FISA はロウイングというスポーツが、これらの課題の最前線にあることを望む。それによって、すべての信頼に足る構成員が、FISA 内で幅広く健全な議論を行うことを開始した。IOC の指示に沿ったロウイングの改革がなされなければ、いくつかの種目を削除され、現行 550 名という、すべてのスポーツ中 3 番目に多い選手数を減らされるリスクを負うことは、明確に理解できる。実際のところ、もし FISA が率先して男女 7 種目ずつの種目を提唱し、各種目の男女の参加者数を同じにしたとしても、ロウイングの総アスリート数から何人かが削減される可能性は依然として残る。

最後に、FISA のオリンピック種目に関して起こることは、2017 年 6 月の IOC 理事会でのオリンピック種目の決定である。世界で一つのロウイング・ファミリーが今、為すべきことは、“自国の利益”は横に置いておいて、ロウイングのグローバルな将来のために最善の決断を下すことである。私たちの決断は、IOC の決断に対する私たちの回答となるわけであるが、それは 2017 年 2 月の FISA 臨時総会で私たちの NF 代表者によって為される。確固とした、魅力的かつ持続可能なオリンピック・プログラムを、私たちは 2 月の臨時総会で確立しなければならない。それは、私たち全員が愛好するロウイングの健全な将来を確約する以外の何物でもない。

意見あるいは質問があれば、feedback@fisa.org に遠慮なく送ってください。あなたの意見は私たちにとって重要です。